
ROAD

空雪兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ROAD

【Nコード】

N7189K

【作者名】

空雪兎

【あらすじ】

鋼の錬金術師の二次創作。 退役した錬金術師に会いに行く大佐・中尉・エドの話。

退役錬金術師の表むきは医者、裏は人体錬成の研究者（ちょっと違うけど）。推理小説とかミステリっぽくしてます。クドくてつたない文章ですがよろしくです。残酷描写はなるべくないようにしたいと考えています。ひろ～い心で、間違いツツコミもやさしくしていただけるとウレシイです。感想や評価は喜んで悶え暴れます。

第1話 2010・12・19改

「これ以上は無理です！」

軍服を着た若い兵士が一人、叫びに近い声を上げた。

一人だけでなく、周りにいる兵士も次々に不安を隠さずに、次々こちらを振り返る。

「無理つつたつてな…」

細かな粒が針の先のように細かく、ほぼ防寒されていない顔を叩きつける。荒れ狂うと途端に小さな凶器に思える雪。ゆっくりと舞い落ちるときはなかなか風情があつてロマンチックな想像をするのだが…。

「マジやばいかも」

誰にも聞こえないように、ささやくようにつぶやいた。

現在進行形で完全に自分たちの行く手をこれでもかと、風とともに猛烈なアタックを続けている。

東の外れ、ほぼ北方に足を踏み入れんばかりにある小さな東方司令部の分署のさらに出張所から出発してはや一時間ほど。

通常であれば難なく通れる道も、直前になつて雪崩の報告を受け、迂回を余儀なくされた。

みっちりと防寒着を着込んでいるが、まったく無いわけではないが、顔はゴーグルと口元まで引き上げたコート程度しか覆われていない。

一歩進むたびに新雪にうずもれる足を引き上げては下ろし、ゴーグルを右目部分だけすこしずり下げる。同じアタックならとびきり

の美人がいい。

容赦ない粒が瞼に叩きつけて、ハボックは軽く舌打ちをした。

「大丈夫だ。足元をよくみていけ！」

回れ右をして去りたいのはむしろ自分だ。仮にもこの場では一番上にいる自分がここで一言弱音など吐こうものなら、既にくすぶっているのが痛いほどわかる彼らの不安を煽って増大させ、部隊もろとも本当に遭難しかねない。

妙な重みが両肩にずっしりとかかる。

いつもは自分ではなく、他の人間がそういった立場に立たされている。いざ、その状況になったとき……などとは考えたこともないし、まずなるはずがないと思っていた。

しかし。今回は状況が状況で。

（よりもよって、なんでまた……）

大佐も中尉もそろって不在となり、指揮権が一方的にこちらに回ってきた。

そんな柄とかどうか、そういったものは社会では関係なく、ただ、順番どおりにめぐってきただけなのだ。

（恨むぜ大将！）

せめて、中尉は連れて行って欲しくなかった。なんであれ、中尉は締めるということには大佐以上。大佐より厳しい。いつも付き従って一步引いているが、後ろでは細かく神経を張り巡らせトリガーを引く準備はできている。実は大佐以上に俯瞰しているのは中尉なのではないかと思えるほどに。

直前にいるたった一人を守るためだけかもしれないが。

見られないように、やや自虐的な笑みを片側に浮かべ、後ろを振り返った。

「もう少しだ」

付いてきている十数人の部下の人数に欠けがないかざつと確認する。

たった今見えていても、瞬時のうちに姿が掻き消えたりするほどの猛烈なブリザード。

また前に視線を戻し、先見しているものの人数は何とか数えた。最前列ほどにいる、やけに大きい連れも視界に入った。

置いてくるつもりだったが、『どうせ怪我をするわけでもありませんから』と強引についてくるといつて聞かなかった。

いつも一緒にいる彼の兄は大佐と一緒に行動している。今回ばかりは軍の命令とあつて、所属していない彼を大佐や彼の兄は連れて行くことはできない。

表情を読み取ることはできなくとも、落胆している雰囲気は肩を落としていたからわかった。二人で目的の物を探しあちこちを休みなくまわり、兄に軍仕事があつても基本的に離れて過ごす事はめつたにない。

（そんなことよりも…だ）

除雪車を先頭にしてはいるものの、その車がすぐに雪に覆われるため、除雪車を人が除雪というけつたいな状態におちっている。まさに三步進んで二歩下がる、だ。

そして少し前から風の音に唸りのような音が混じりはじめている。迂回路となるこのルートは崖を切り出した道とはいえない代物で、覗き込むことすらためらう崖下は、何メートルあるのかわからない暗く深く雪と風とをぽっかり空いた切れ目へ飲み込んでいる。落ち

たらひとたまりもない、生きていたとしても見つからずに終わるのではないかと、寒さと違うものがぞくりと背中につたう。

助けに向かうはずが救出される側にはまわりたくはない。

突然、後方からパンパンと銃声が聞こえた。

「バカ！ なにやってんだ、こんなところで！」

それが原因で雪崩が起きるという話は聞いている。場所によっては突然の雪崩で事故を防ぐため、ダイナマイトを仕掛けて人工的に雪崩を発生させるともきく。

「ハボック准尉、く、熊のようです」

「っはあ？」

面子はほとんどが司令部から連れてきた連中である。先行しているのがこちらに駐在してる現地勤務の連中数名。

ハボックが呆けた返事をした脇を先行隊の一人が文句を言いながら寄ってきた。

「ここで銃を撃ったら危険ですよ！ 准尉」

「わかってる、やめさせろ」

後ろでちよつとした騒動が起こっているようだが、風に消されて途切れ途切れにしか聞こえてこない。というか、地元民は熊などめったに出ないと話していたではないか。

そして、最悪の状況が彼らをまさしく飲み込むこととなった。

「ハボックさん！」

彼——アルフォンス・エルリックが近寄ったと同時。

「雪崩だああ！」

細かい地響きとともに轟音が降りかかってきた。

「全員かがめ！ 顔を腕で覆うんだ！」

顔を腕で覆えばたとえ雪に埋もれても空間ができ、息ができて助かる確率が高い。しかし、パニックになっている連中に聞こえたかどうかはわからない。

「兄さん……！」

濁流のような雪流に巻き込まれる直前に聞こえたのはその声だけだった。

第1話 2010・12・19 改（後書き）

第1話というかプロローグ的なものです。
改訂しました。つぶやきは更新履歴にて。

第2話 2010・12・19改

少し時をさかのぼる。

もうすぐ冬の姿が近づいてくる、うらかな小春日和。

大佐こと、ロイ・マスタングは大總統執務室で、部屋の主を五分ほど待ち続けていた。いつでも忙しく動いている大總統が執務室にいないことなどよくあることだ。

神出鬼没で側近の人間ですら撒かれることもしばしばあり、振り回されてげんなりとした付き人を見かけることも多い。

今ももちろん、呼びつけるだけ呼びつけたにもかかわらず、やがて十分が経過しようとしていた。

「やあやあ、待たせたね」

再び銀時計を開きかけたとき、ひらりとベランダに続く窓からは主は戻ってきた。

型どおりに敬礼をすると、長々話をするつもりなのか、めずらしく大總統キング・ブラッドレイはソファに座るように進めてきた。

「さて、少し相談なんだがね」

デスクに右肘をついたまま体を斜めにゆったりと足を組む。

（どうせいつもの、相談という名の命令だろう…）

相談があるとか、お願いがあるとか、色々言い方が違うが、大總統の願いを聞けない人物などいないはずがない。今回ももちろん引き受けるに決まっているからこそ、のったらくったら話すのだ。

どこを見ているのか隙のなさすぎる隻眼は、にこやかにしていても、まっすぐ射るようにロイに注がれていた。

「相談ですか？」

「ただの命令だがね」

「はあ…」

結局命令かよ！ と腹のうちで一吼えし、間延びした返事を返す。

「子供を中心とした病気が流行しているのは知っているだろう？」

「ええ、新聞に毎日載っていますね。今はセントラルのみの流行のようですが」

「そうそう、それなんだが。決定的な原因がまだ判明していない上に、流行は拡大を続けている。…正直、こちらの優秀なおかかえの医者もお手上げぎみでね」

アメストリス、セントラルのどこから発生したかわからぬ、乳幼児から十代の子供中心に風邪のような病が流行っていた。

ただのインフルエンザ程度ですむものが大半であったが、あまりの流行ぶりに国もインフルエンザの猛威に注意、という報を出したほどである。

そもそも、このような時期に流行することも珍しく、医者や医療関係者は首をひねるばかりである。弱者であれば老人や病人にも流行りそうなもののだが、おそらく抗体の問題であろうという推測がでた。

「原因究明とワクチンの開発できる人物でもお探ですか…」

手に余ってきたのか、それとも別の意図があるのか。ロイはもちろん後者であることは判つていても型通りに質問を投げる。

「…そういったところかな」

「すでにアテがあるんですね？」

（狐と狸の化かしあいじゃねえんだよ）

ロイの腹を知ってか知らぬか、ついと片側の唇をあげ、にやりと大總統は笑みを浮かべた。

そして、唐突にある人物名を口にした。

「裂光の錬金術師を覚えているかね？」

「退役されて、ずいぶん…経っております」

「東の内乱の直後かな、退役してすぐに東の外れに引っ込んでしまったと聞いている」

「その…裂光の錬金術師が、この件について必要である？」

さつさと終わらせて東に、自分のいるべき場所に降りたかったロイは、先へ先へと進める。

今日中に戻るなら、そろそろ列車も制限されてくる。

「まあ、まあ、そうあせらずに…大佐。確かに、優秀な医療従事者が不足している。ただでさえ医者日々の仕事もこなさねばならないし、今回の流行の対処もある。とにかく、猫の手も借りたいとはこいういったことを言うのだね」

わざとらしいそぶりで肩をすくめた。

引っ込んでしまったと聞いている、というのはもちろん嘘に決まっている。優秀な国家錬金術師がそう簡単に退役できるわけがない。密偵をつけて必要があれば事細かに報告させているはずだ。

何となく嫌な予感がする。

大總統に向いていた視線を外し、瞬きをひとつゆっくりとした。

「ご命令とあれば…」

「察しがいいのだな」

裂光の錬金術師に会うか連れてくるか、要するに脅迫に近いことでもしてこいということだ。

まったく最近の軍は大規模な戦争の類がないために平和ボケしており、利権争いに夢中な連中の集まりになりつつある。下っ端にもそういった風潮が見えはじめていたし、平和軍人のやりどころのないもてあました腕力は、正義感が強くまっすぐな者ほど、暴力や悪事のほうに傾きやすい。

今回の流行騒ぎでも、ワクチン開発独占販売、一儲けしようとかくらんでいるはずだ。

戦闘専門の軍人より、ただの口達者な金儲けに長けた軍人が、少しずつ権力を伸ばしつつあった。

それはともかく。

『念の為の紹介状だ。持って行きたまえ』と、ロウできつちりと封がされた封書を渡された。

その後、東方司令部からとして持ち込んでいた報告を二、三し、ロイは執務室をあとにした。

綺麗に刈り込みがされている芝生を両脇にしたがえた、正面入り口の石畳の上で、後ろをふと見やる。

やはり、見下ろされるより見下ろす方が数段気分がよさそうな建物。いずれは、いや、かならずそうするつもりだ。

(…これから、さ)

セントラル中央司令部内にある、あまり足を運ぶことのない大佐の部屋で、リザ・ホークアイ中尉は手にした書類にひとつため息を落とした。

こちらに来所していると気づかれたら最期、東に戻る前によろしくと、書類が次々と積み上がっているのだ。

（今日中に終わるかしら…）

自分で処理できるもの、大佐が目を通して処理するもの、東に持ち帰るもの…。仕分けだけでも一時間近くかかった。さらに処理中にも誰かしらが訪れたり、新たに書類が届いたり…。

落ちかけた書類を掴み損ね、指先に鋭く小さい痛みが走った。

「…もう！」

一人だけというのもあつてか、小さく声でも声をあげてしまう。咄嗟に指を口元にあてて血をぬぐい、時計を見た。

（確実に泊まりだと思っていたけど…）

どうやっても今日中に仕事が片付くはずがないと思っていたから、リザは時間をみはからって久しぶりに友人と食事でもしようと、電話をかけていたのだった。

無理やりに残業してまで終わらすこともないし、今日はしたくなかった。

約束まであと一時間ほど。

血が止まったと確認したとき、扉が荒々しげに開けられ、むっつりとした表情の大佐が姿を見せた。

第2話 2010・12・19改(後書き)

2010・12・19改訂。

第3話

大分陽も傾き、大して広くもない、窓もひとつしかない部屋はもう薄暗くなっていた。

後ろ手に体重をかけてゆっくりと扉を閉める。目頭を両指で揉みほぐし、ふう、と息をひとつ吐く。

「お疲れですね」

扉脇のスイッチが少尉に押され、弱々しい明かりがついても、寒々しいままだ。

「そうかな？」

すつと背筋を伸ばしてデスクを見ると、出て行ったときよりも明らかに量を増している束が待っていた。軽く苦笑し、髪をかきあげた。

「また寄ってたかって、持ち込こんでくれたな」

「だいぶ処理したのですが…」

「いいや…すぐ必要なら直に私に持ってくるさ。催促がくるまでは順番どおりに処理すればいい」

デスクに足早に近づいてどさりと腰を下ろす。安普請のイスがギシ、と悲鳴を上げる。

「…少し早いが、もうあがってかまわないよ」

早速書類を掴み、目をそこから離さずにロイが言う。

いわゆる定時までには残り一時間を切っていた。

「…ですが」

「到着早々残業はきついだろう。数日はここにいないことになったし、ゆっくりしたまえ」

次々とサインをすると決済済みの箱に書類を放り投げる。

「別にサボりはしないさ。私も適当なところで切り上げるよ」

思っていたことを着かれたように、中尉の瞳は開いたが、こちらを見られているわけではないので、ほっと息をひとつ吐いた。やはり一日仕事で終わるわけがない。

「そうでしたら、お先にあがらせていただきます」

「ああ」

なぜか中尉をほとんど見ようとせず、黙々と次から次へと仕事を進めてた。いつもはすぐは取り掛からないロイに中尉はいぶかしそうに眉をひそめたが、問い詰める理由もないし、自分勝手だったとは思ったが、約束もある。

自分のデスクの上をざっと片付け、帰り支度をし、コートを腕に引っ掛けた。

「それでは…お先に失礼します」

「ああ、お疲れ」

本当に一目もくれずに声のみだった。

閉じられる音がして、確認するかのようにそこで顔を上げた。別

に見られるのがいやなわけではないが、一人になりたかったのだ。
重みがかかったイスが、再び抗議の声をミシリ、とあげる。

（また、裂光の名を聞こうとは…）

足もデスクの上にあげて、中尉から『行儀が悪いです、大佐』と、突込みがきそうな体勢にした。結局、仕事はすぐに放り出すことになったわけである。

それにしても、今更退役した『裂光』にまで協力という名の泣きつきとは、現在の医療部はろくな連中がいないのか。

確かに、『裂光』は医療関係で相当なクラスの人間だったし、東の内乱：イシュヴァールでは色々な軍人や、ロイ自身も世話になった恩人である。

二つ名を裂光こと、ヴォルフ・コーエンという名の錬金術師の最終階級は大佐であった。もちろん、医療部では、その当時錬金術師としては類まれな、ということ将軍職を望まれたものの、現場第一主義の彼はそれを拒否し続けた。

イシュヴァール殲滅戦にも前線に赴く軍人たちの医療サポートをしていた。軍人のみ、というのは上層部が無理やり指示したもので、実際は誰であろうと、陰では敵であろうと治療を施していた。

誰よりも公平で誰よりも戦争を厭うていた、と今なら思う。

そのころのロイはまだまだ錬金術師としては駆け出して、自分が心身ともに受ける傷に対してはひどく敏感だったにもかかわらず、他人を気にかけるという余裕などほとんどなかった。

表面的には冷静でとにかく実直に使命に従おうとあまり、ちょっとした休憩時などは同僚のヒューズがあきれるくらい内に閉じこめることが多かった。

任務に忙殺されているほうが精神状態が安定していた気がしていたが、ハイとローを日々繰り返す天秤が触れすぎて安定が取れていないほうが多く、結局いつもヒューズに迷惑をかける羽目になって

いた。

閉じこもりが三回目になったとき、さすがに見かねて無理やりに軍医に連れて行かれたのである。

ヒューズ曰く、『自分自身も焼き尽くしかねない』状態だったようだ。

くたびれ果てた何とか形を保っていたテントに、彼は、いたってはじめはのんびりとロイと向き合った。

『どうかしたかね？…』

そういつて振り返った彼は本当にこんなところに居てはおかしいくらいの、微笑と姿でそこにいた。

肩下の雑に一括りされたプラチナブロンドと、顔立ちはずっきりとした涼しげな造作で、青と緑が混じった瞳をもった貴族風だが、肌は外勤者と同じように陽に焼けていた。ゆったりとしたオーラというか、雰囲気を漂わせていた。

イスに座らされ、すでに見知っていたのかヒューズはあれこれと話をし、ようやくと当の本人を連れてきたとか何とか言っつてロイを親指で示した。

『そうか、彼が例の錬金術師なのか』

完全にお互いを見るかたちで向き合う。透明な瞳が奥底まで覗き込まれているようで、落ち着かず、視線をはずす。傷や骨折などといった外科治療ではないというのは明らかである。外で待っている、と言いつ残しヒューズはすでにその場にはいなかった。

『…ただの一般兵ならともかく、君は仮にも国家錬金術師なわけだ』

その言葉にぎりつと血管が浮くほどこぶしを握った。

第4話

…分かりきったこと聞いてどうする。

戦闘真ん中へと突っ走り、息つく暇もなく闇雲に攻撃し、同じ人間がただのモノのようにゴミのように転がる有様が強烈に脳裏に刻み込まれ、休息中とて、彼らが夢の中まで血まみれの手を差し出し『なぜ?』と襲いかかるのだ。その中では自分も正気を保つことはできず、逃げて逃げて、それでも追いつかれ、足をつかまれる。意識レベルが普通な状態では、とてもこの血を吸い込んでしまった大地には立つことなどできない。あの赤い瞳の人々は自分を何度殺しても殺したりないはずだ。

『聞いているかね?』

コン! と机を叩く音でロイは目の前の現実に戻される。他人と話していても自分の内に入りこんでしまうとは…。唇をきりつと噛み締めた。

コーエンは口元をへの字に曲げ、足を組みなおした。

『…もう一度繰り返すが、錬金術師だろうがなんだろうが、人間には変わりはない。ここには君のような輩は大勢やってくる。戦争が続き、初めのうちは自分が正義側のものであると思っている。だが、長引けば長引くほど、彼らの人となりを見て、いつからか本当に自分のしていることは正義なのだろうかとね』

イシュヴァールの人々が別段、特殊な人種だったわけではない。宗教の自由などあっていい。暴力でどうにかする、という概念があり彼らにはなかったようであるが。

大總統は話し合いをするなどということは全く頭になかったのか。

彼らが自分たちより下層の者という妙な意識が軍の中にあつた気もする。

もしかすると軍だけではなく、アメストリスの国民が、与しない彼らが無意識に排除しているのではないか。トンボの羽を千切ってしまう子供の無邪気な残酷さと同じように…。

『それを考えてばかりで、何になるかね』

軍人であれば出てきそうな言葉を軍服ではない、白衣の医者は続ける。

『…軍人や錬金術師はいちいち考え考え込んではないと思います。けれど』

『けれど？』

『俺はそういう人間ではありません』

『なら、それで良いのではないかね？』

『…は？』

軍人として、錬金術師としての説教でもたれるのかと思いきや、何の問題があるという風に、彼は肩をすくめた。

『周りがどうであろうと、自分のスタンスは崩さなくてもいい…、まあ、理想論ではあるかもしれないが…』

瞬きもせず、ロイはじつと彼を見つめる。

『他人は同じような考えや同情はできても、全く自分と同じ考えや感情を持つことは難しい。色々違って当たり前だ。親兄弟、夫婦、恋人であっても。だから、自分の考えと行動が伴わなくても、おかしいことはないし、悩むのもあたりまえだよ』

彼はイスから立ち上がった。両手を白衣のポケットに突っ込み、左脇にある戸棚に向かった。後姿だけでしかもだぼだぼの薄汚れた白衣を着ていても、立ち姿は妙に隙が無く、やはり軍人なのだと口イは思った。

しかも国家錬金術師の証である銀時計が、机の上に無造作に放り出してある。貝のように開いたそれは、単なる時計として利用しているようだった。

（国家錬金術師だったのか…）

国家錬金術師といえば、軍の中でも一目置かれる存在だ。そして自分は国家錬金術師であるというプライドのようなある種の独特な存在感や空気がそれぞれある。

医療系、ということは分かるが、それだけではない。攻撃系もある程度はできるだろうし、ただでさえこんな戦争最前線で少なからず危険な目にあってもおかしくはないはずだ。

（二つ名は？ どういう術を使うんだ…？）

ごそごそ引き出しをかき回し、あったあったとつぶやきながら彼は戻ってきた。

『どうしても、眠れなかったら飲むといい…心配しないでいい、単なる安定剤だ。支障がでない程度に調整してある』

三つほど折りたたんである紙を机に置いた。

『…ありがとうございます』

いらないと拒否するわけでもない、必要になつたらありがたく使わせてもらおうと、ロイはポケットに押し込んだ。

『また、何かあつたらくるといい』

これ以上話すこともないというように、ただ、うすぼんやりした笑みを浮かべ、再びイスに腰掛けた。ロイも立ち上がると軽く頭をさげ、踵を返した。

自分から進んで来たわけではないし、ほんの数分程度の会話だったが、相手が十分得体の知れない人物だと思った。

『そうそう、私の二つ名は、裂光だよ』

心でも読んだのかというように、ロイはぎよつとして振り返る。しかし、彼はこちらを伺うでもなく銀時計を見つめて弄び、ぱちんと蓋を閉めた。

外ではヒューズがその辺の棒っ切れでがりがりど地面になにか書いていたようだったが、ロイが出てくるのを見ると同時に立ち上がり、足で砂をかいた。

『よお、済んだか』

何がどうだったとか、そういったことは一切聞かないつもりなのか、ヒューズは黙って笑みだけを浮かべてロイを見やる。

『ああ…それより、ヒューズ。軍医が国家錬金術師って聞いてなか

つたぞ』

『あれ、言ってなかったっけ？』

もやもやしたのが晴れたわけではないが、少しだけ悲觀的に傾いていたというかとらわれていた何かは多少は落ち着いてくれたようだ。そんな当たり前のことに気づかなかったなんて。激しさも苦しさも辛さも悲しみも色々あるのは。

（俺は俺の考え方でいいんだな）

『ヒューズ…ありがとうな』

『…なんだ、今更。』というかキモチワルイぞ』

妙に落ち着いたロイの瞳は強く輝きを取り戻し始めていた。

その時からだったろうか。軍で国で自分がすべきことを描き始めたのは。

第4話（後書き）

4話まで時間が空いてしまいました…ゴメンナサイ。チェックしても文章が変だなあといいものが結構あって落ち込む…。

第5話

「青かったな、オレ…」

コーエンの顔すらパーツでしか浮かばなかった断片的な記憶だが、よくもまあ色々悩んだりしたものだ。二十歳前後の頃をあらためて反芻すると、頭をかきむしりたくなるほどだ。

今でも異例の速さで出世街道を進んでいて、上層から未だ青二才呼ばわりされているので、過去形にするにはまだ早い気もするが。ヒューズのように髭が似合うわけでもないし、ハボックのようにいかにも白人青年という風貌でもない。どちらかというとやや童顔で若くは見られる。

若く見えて喜ぶのは女性が多いだろう。

（髭も似合わんしなあ…）

想像してみるが、無理すぎて余計に落ち込んでしまった。十歳頃は二十歳が遙か大人に見え、二十歳になればなつたで、三十歳代の人間がより大人に見えるが、実際、その年齢になつても十代も二十代も大して変わっていない。ただ、無駄に頑固になつていき、斜めから物事を見て大人になつたと思ひ込んでいる。そして今まで得た知識というか、学習してきたものを繋いだ言葉で表し、『大人になれば分かる』というその魔法のような言葉で締めくくればいいのだ。そうして子供は大人はすごいんだという意識が刷り込まれていく。その繰り返しだ。

ふう、とため息をひとつ落とし、上げていた足を下ろした。

直後、ココン、と薄暗い部屋にノック音が響いた。

「はい？」

こんな終業時間近くに来るものなど大体決まっているが、予想通り姿を現したのはヒューズだった。

「よう、ロイ。仕事終わったかあ」

相変わらずの軽快な口調と足取りで、脇に金髪、金眼、赤のコートを纏った少年と共に入ってきた。

「鋼の… セントラルに来ていたのか」

「その言葉そっくり大佐に返すぜ」

こちらはいつものとおりのおつきらぼうな言い方で、鋼の錬金術師ことエドワード・エルリックは、肩と頭に置かれた腕からよいせ、と逃れた。

「ああ、いい腕置きが…」

「だが、チビだつて？」

なにもそこまででは言っていないだろうに、身長問題に敏感に反応するのはいつものことである。大人の中に混じることが多いから仕方がないのだが、年齢の割には小柄ではあることは本人にとって結構なコンプレックスなのだ。

「兄さん、大人気ないよ」

続いて扉をくぐるように入ってきた全身鈍色の鎧は、弟のアルフォンス・エルリック。大の大人より大きい鎧の中身は空なので、空

洞の中から響く声がくぐもって聞こえてくる。彼は数冊のB4ほどある本を抱えていた。

「珍しいな、そろいも揃って…。何か用かね？」

ぐうたらな姿を見られなくて内心ほつとしたロイは、三人をゆつくりと見渡し、弟が抱えている本に目を留めた。おそらく、用件とはこの本についてだろうが。

「ああ、これ禁持出なのを頼み込んで借りてきたんです」

視線に気づいたのか、アルフォンスは本をデスクの上に置いた。割と凝った装丁で、背表紙には禁持出シールが張られている。

「それでお目付けがヒューズなのか？」

「まあ、そういうこと」

がしがしとエドは頭をかき、本の上下をひっくり返してロイに表紙が見えるように差し出してきた。特権的な行動がわりと認められることが多い錬金術師といえど、基本的にルールは遵守しなければならない。今回は例外も例外で、軍施設内のみ移動、時間指定で返却する、ヒューズが付いてくる、という約束を取り付けてようやく持ち出し許可が下りたのだ。

「中佐が、この作者ならアンタがよく知っているっていうからさ」

「なに？」

差し出された本を受け取り、革張りで金色の箔押しで押された作

者名をうかがうと、先ほどまで浸っていた思い出のかの人だった。

「ヴォルフ・コーエン……」

思い出すことも口にすることも最早なくなつて久しいのに、今日はまたどういうわけか、しつこくその名前にかかわっているようだ。偶然というのか必然というのか、なんともいえない息苦しさを感じ、ロイは襟元に指を突っ込んで首周りの束縛を解放した。

「確かに、知ってはいるが、よくは知らん」

頼杖をついてぱらぱらとページをめくり、ぎろりとヒューズを睨み付けるが、彼はニヤニヤと笑みを浮かべたまま腕を組み、ソファの背もたれに寄りかかるように立っていた。

「知り合いとかじゃないんですか？」

アルが問うた。エドはソファに勝手に座っており、安い合成皮革は座り心地が悪いのか、ちつと舌打ちしていた。

「イシユヴァールの頃に世話になつた軍医だ……。もちろんヒューズも知っているはずだが？」

「ああ？ 中佐が『大佐のほうがよく知ってる』っていうから、わざわざきたのに……って中佐！ 逃げんなよ！」

「その言葉遣いはよしたまえ。お前より階級が上なんだぞ」

そろりそろりと後ろ足でドアに忍び寄りはじめていたヒューズは、びくつと動きをやめ、ロイはそんなやり取りを見てまたため息を吐

いた。

「で、著者について聞きたいことでも？ さつきも言ったようにた
いしたことは知らんぞ」

「この本、全部で五冊のはずなのに最終巻がねえんだ。でもって書
いた本人が生きているっていうことまではわかったけど、どこに住
んでいるのかさっぱりわかんねえんだ」

そう言つてエドはパツと両手を上げて、『お手上げ』のポーズを
とつた。

おそらく医学書にカテゴリーされるそれは、錬金術の医学につい
ての応用云々という内容らしい。タイトル、作者と同じ箔押しされ
た番号が順に振つてある。四冊目の終わりをめくると、一冊目には
きちんと『前書き』があるのだから『後書き』も大体あるはずなの
だが、中途半端なところで終わつていた。もちろん、目次にも最終
章の項目が並んでいるが、一冊で一章分、五冊めが最終の五章にあ
たつていた。

第五の元素ならぬ五冊目が見つからないとは。

「…尻切れトンボ状態だな。しかし、この装丁だと金が掛かつてい
るようだし、何冊も作られていないんじゃないか」

「南部でこの本を見つけて、中央図書館にはあるだろうと思つて行
つてみたら、最終巻だけここにもないって言われて…とにかく、住
んでいる場所を教えて欲しい」

たしかに、作者なら持つている確率が高いし、著者に直接話を聞
ければ一番手っ取り早い。それに、ロイは今なら住所を教えること
など簡単なことだ。本を閉じ置き、デスクの引き出しに手をかけた。

大總統からの封書と一緒に、住所が記されている書類もそろっている。

かなり嫌がりそうな顔をするだろうな、と苦笑する。

「なにがおかしいんだよ」

「いや、なに…偶然なのか必然なのか考えたただけだ」

「はあ？」

大總統から命を受け、エドたち兄弟が訪れようとしている場所に、自分も赴くことになっていることなど、もちろん彼らは知るはずがない。基本的にイーストシティの司令部に詰めている自分にとって、国中あちこち移動しているエドの目線で動くのもたまにはいいかもしれない。

前髪をひと払いし、引き出しの中から封書と折りたたまれた一枚の紙を取り出した。

第5話（後書き）

進みが遅いですね。自分の能力を考えてなかったのもどうかと思いますが。それでも読んでくださる方がいてウレシイです。

第6話

陽が存在を闇に溶け込ませると同時に、じつとりと冷氣が降りてくる。

冬へと向かっているのはわかるが、夜になれば駆け足で迫っているのではないかと思うほど冷え込む率がめつきり高くなった。

早々と暖かい明かりと食卓へと急ぐ人は見えていて切ない。それは自分にはそういった家がないからかもしれないが、そのぬくもりを知っているから余計に苦しく感じる。

コートの襟とマフラーをぐつと両手で寄せると、ふう、とりざはかき抱いた指に息を吹きかけた。

いったん宿舎に戻り軍服から私服に着替え、待ち合わせ場所へ向かったものの、いつもより早く終業したために早く着いたのだった。軍服で市街をうろつくと、いつもどこかでちらちらと視線が付きまとい、振り払うこともできず、まとわり付いてくる。今はただの一市民として群れに組み込まれ、誰も自分を気にするふうでもない。いろいろ細かく縫いこまれたり飾りが付いている軍服は正直肩が凝ってしまう。私服のときは軍人としての重さや責任感からちよつとだけ解放される。きつちりと巻き込んでいる髪もふんわりと下ろされ、しつとりとした艶が街頭の灯りを弾く。

セントラルの中央のさらに中心というべき場所に象徴といわんばかりのサイズの噴水が鎮座している。そして噴水から数メートルおいた、中央司令部真正面に当たる部分には、台座はレンガ造り、時計はどこにでもある円形のビル三階ほどの高さの時計が立っていた。時刻を示す針以外、まじまじと見る人はそんなに多くはないが、針を止めている留め具には国家錬金術師の紋が彫りこまれている。

そしてその噴水と時計を花壇とベンチが取り囲み、さらにその外側は車道で、八方へ伸びる道路から入り、ここを旋回してまた八方の道路へ進路を取れるようになっていた。

待ち合わせ場所に最適なため、真夜中や早朝以外はかなりの人間でにぎわう。待ち合わせだけでなく、観光客の写真撮影にも最適なスポットでもあった。

リザは斜め後ろにそびえた時計を振り仰いだ。
待ち合わせ時刻五分钟前。

「ごめ〜ん、リザぁ。遅れたかしらぁ」

正面からゆるいウェーブの赤い髪をし、ややきつめの茶色い目をした女がリザに声をかけてきた。

「うっん。まだ五分前よ。……そんなに急いでこなくても大丈夫よ」
「そう？ よかった」

ふわっと笑い、かなり前から走ってきたようで、息をふうふうと落着かせるように胸元に手を置く。笑うと目元がゆるくなり、人受けのよい、おおらかさがにじみ出てくる顔をみて、リザも微笑んだ。

「ひさしぶりね、メグ。突然呼び出したりして大丈夫だった？ 迷惑じゃなかった？」

「そんなこと！ リザがこっちに来てるなんて知らなかったけど、残業抜ける口実になって助かったわよ。むしろ感謝だわ」

ぺろつと舌をだし、ウインクをする。茶目っ気もある彼女と二人、くすくすと笑いあう。

そんな二人の楽しそうな姿に目をとめる者もいたが、こういったやり取りは周りにいくらかでもおり、日常的な風景のひとつで、すぐに通り返っていく。

「さあ、行きましょう！ 久々にセントラルにいらしたのですから、どこへでも付き合いますわよ？」

「そう？ じゃあメグの案内に期待いたしますわ」

「まかせて頂戴」

ほんとメグはコートの前を叩き、リザの腕を取って、時計を背にして歩き出した。

横断歩道を渡り八方に伸びた大通りのひとつに入り、数百メートルほど石畳を歩き、通りに面したビルのひとつで歩みを止めた。

ビルの中央に両開きの木戸があり、脇は腰高あたりから天井部分まで、すべてガラス張りで中が伺えた。ざっと見る限り、リザやメグと同年代くらいが多そうだ。そこは一階から三階までのフロアを使用したかなり大きいホールだった。

「結構大きいし、店員の目が行き届きそうないってカンジだけどね。でもフロアごとにカウンターが付いているし、つまみ系もイケてんのよ」

メグはすたすたと入り、店員にふたり、というピースサインを突き出した。常連なのか、店員もいらっしやいと笑みを浮かべて、どろどろと左手の木製の階段へと手のひらを向けた。

一階は右手に、どこから運んできたのか、かなりの長さの一枚板のカウンターと、丸テーブルが十組ほどあり、ここは立ち飲みが基本のようだ。

二階以降は普通に四角いテーブルとイスのセットが数十組あり、三階は貸切もできるのよ、とメグが言った。まだ六時をいくらか過ぎたばかりなのに、すでにほぼ満席で、リザとメグはカウンターのスツールに落ち着くことになった。

任せてもらっていい？ と聞かれ、リザはメグの注文にまかせることにした。

「ビール二つ。それとグリルチキン、シーザーズサラダ、チーズの盛り合わせね」

なにがおすすめで美味しいのかは、常連が一番良く知っている。店員も注文を聞いてうなずき、すぐにサーバーからビールを注いでくれた。

他の店員もダラダラしておらず、颯爽と行きかい、客と談笑しつつも手を休めずに空きグラスや皿を回収していく。

すがすがしいくらいの動きに、どこかの誰かに彼らの爪の垢でも煎じて飲ませてやろうかとリザは思った。

「じゃ、かんぱーい！」

グラスを合わせるとメグは豪快に一気に飲みした。ごくごくと喉を鳴らし、気持ち良いほど彼女は豪快だが、楽しそうに飲み干した。

空のグラスをプラプラさせ、おかわり〜と告げるとすぐに二杯目が、今度はサラダやらと一緒にやってきた。すぐに料理が運ばれてくるのは、厨房の手際のよさか。客を待たせず、料理も美味ければ流行るに決まっている。

「また、飲むわね」

「そうお、いつものことよ。……で、リザ？　また例の上司と一緒に来たわけ？」

「まあ、そうね…直属の部下だし」

ビールを一口含む。キンキンに冷やされてはおらず、ちょうどよい温度と、やや軽めできりっとした飲み口で、リザはすぐに気に入った。

「これ、美味しいわね……」

「そうじゃなくって、何か進展とかないわけ？」

「え？ 何の？」

「だーからー、男性としてどうなのよ、ってこと。私たち、もうお年頃っていうかわいい歳じゃないでしょ」

さらに一口含んだビールで、リザはゴホツとむせる。メグは単なる話題のひとつのように、チーズを小さくちぎり、口に運びながらそういった。

「な、なんなの、一体……」

アルコールのためか、そんな突拍子もない言葉のためなのか、耳がかあつと火照ってきた。

「おやおや、純ですねえ、リザさんは。それじゃあ、なあんにもイロコイ的な展開はないんですね？」

アナウンサーのようにマイクを差し出すそぶりをする。リザはぺちん、とその手を軽く叩いた。

「なにもあるわけじゃないじゃない。ただの上司と部下よ。というか、お目付け役みたいな」

「ぶつ、なにそれ」

「目を離すとすぐにサボるし、勝手にどこかに行こうとするし……、雨の日は無能だし」

『雨の日は無能』という言葉はメグのツボに入ったらしく、『しよっぱすぎ〜ギャハハ〜』とカウンターに突っ伏して笑った。

「そついや、二つ名が『焰の』だったわね。そうね、水は天敵よね。」

リザが大佐の後ろで常に抱えているのは、替えの手袋が入ったケースである。それすらも水に濡れないように完全防水加工されており、どんな大事な書類が入っているのかというくらいに嚴重な入れ物である。しかし、中身は他人から見れば単なる手袋である。それを四六時中大事そうに抱えているのは結構間抜けなカンジがしないでもなかった。しかし、錬金術師である大佐には大事な商売道具である。スぺアはいつでも準備しておかなければならなかった。

第6話（後書き）

昨日のうちにUP予定だったのに、日をまたいでしまいました……。仕事で忙しくてなかなか筆（？）が進まず。思ったのですが、携帯の方読みにくくないですかね？？

第7話

『雨の日は役立たず』というのは、リザにも近しい言葉である。

銃器類などというものは湿気や水はあまり歓迎されないシロモノで、機械自体の動きが鈍くなるのはもちろん、構えたところで雨や霧で視界かききにくい時は標的がそれてしまうことなどよくあることだった。

「リザのスキルならもつと上にいけそうな気がするし……セントラルに異動したいと思ってないわけ？」

滑らかなカーブを描き綺麗に磨かれていたグラスも再び空になりそうだ。すでに数杯。結構なピッチだが、全く顔に出ないのは肝臓が相当強いのだろう、口へ運ぶわけでもなく、サラダをフォークでつつく。

色々な会話がうねりのようにうわーんとフロア内に広がり、店内はますます密度と話し声のボルテージも上がってむせ返りそうだ。いくつか空いていたカウンター席もリザの隣りひとつが空いているくらいだった。

「結構東部も気に入ってるのよ。四季もはつきりしているし、空気もいいし……祖父の目が気になるけどね」

リザの祖父は当方司令部に所属している將軍である。母方なので姓は異なり、事実を知っている人物も上層のごくごく一部のみだ。祖父にとって見ればかわいい孫、しかも孫娘なのだから、目の届く範囲内にとどめておきたい気持ちもわかる。軍に入ると決断したときも、複雑な表情を浮かべたのは忘れられない。

「なあんだ、大佐が目当てじゃないの？」

「だから、違うつてば。どうしてもそっちに振りたいの？」

「ふうん……でも、向こうはどう思っているかはわからないわよう」
「まさか」

「セントラルでは割とあるわよ。社内恋愛？　みたいな。職場で一緒で、しかも結婚して本当に四六時中ずっと過ごすなんて、私には考えられないけどね」。私なら軍以外の人間がいいわ」

ちょっと失礼、とメグは席を立つ。まあ、ハイピッチでのみ進めれば生理現象も近くなるわけだが。一応気にはしてみたが、足元もしっかり店に入ってきたときと変わらずに、すたすたまっすぐ化粧室へと向かっていった。

（あいかわらず、強いわね）

丁度半分ほどになったグラスをコースターの上に置いた。周囲を見れば、それぞれの話が花盛りというようで、血色のよくなった連中の笑い声がどっと上がったと思えば、またその反対側では追加注文の声上がる。

足を組みなおし両手を組ませた上に顎を乗せながら、カウンター内をさくさく動く店員を様子を眺めていた。

「ねえねえ、彼女一人？」

明らかにナンパとわかる軽い声が頭上から降りかかった。しかし、まさか自分のことではないと思い、振り返らない。

「ねえつてば、聞いている？」

ぐい、と腕をつかまれ無理やり振り向かせられた。リザのひとつ

だけ空いていた席に、コート代わりなのか、カラフルな模様の大判布を上半身に巻き付けた、変わった格好の男がそこにいた。

「ココ空いてる？」

「……空いてるようですけど」

明らかに不審者を見る目つきで見たが、男は何事もないように、店員に向かって「ビールふたつね」と注文をした。

「それ、もうぬるいでしょ。これと交換して」

返事も聞かずに、リザのグラスを取り上げ、新しい飲み頃のビールをしっかりと持たせた。

「はい、かんぱーい」

リザの手を掴んだまま、勝手にグラスを合わせてグラスをあおった。男もなんと美味そうに喉を鳴らして一瞬で琥珀の液体が体内に飲み込まれていく。

「ぶはあゝひっさしぶりだから美味しいこと！ あれ？ 飲まないの？」

「手を掴まれては飲めません」

「ああ、そうだね」

ぱっと手首が解放され、少しだけ体を反対側に寄せて、相手との空間を広げた。

「どうぞ？ 遠慮しないで」

「見ず知らずの方からもうわけにはいきません」

「ぬるくなると美味しくなくなっちゃうし、店にも悪いから。ね、一杯だけだから」

「はあ……」

妙になれなれしいが、どうしてかいやな感じはしない。気づかないように全身を観察する。ぼさぼさの目に掛かるくらいのアーモンド色の髪と、黒に近い深い濃紺の瞳を持ち、今は異国人風の服装だが、着ているものが少々色合いが突飛なだけで、どこにでもいそうな青年である。

持たされたグラスを戻すわけにもいかず、左手首を右手で掴みなおす。正直、一瞬明るい夜空のような瞳に引きずり込まれそうになっていた。……アルコールが回ったのかもしれない。

「ねえ、名前教えてくれる？」

「そういう時は自分から名乗るのが礼儀っていいませんか」

パターン通りの質問にパターン通りの返事を返した。……ベッタベタなナンパである。

「それもそうだよね……ちょっと待って」

ストールというか、マントというかの中からベージュの布帛のシヨルダーバッグが現れる。しばらくゴソゴソかき回し、服装とバッグには似合わないくらいの上等な皮製の黒いケースを取り出した。

どうやら、それは名刺入力で真新しいものを一枚引き抜ぬき、右手の人差し指と中指に挟んだそれを差し出した。

「こーいもんです」

第7話（後書き）

前回の続き。ベタな展開で気落ち。もう1回りザの回で、その次に大佐の回に戻る予定です。

第8話

真っ白な紙に打たれていた真っ黒な文字は、会社名に住所と氏名ありふれたパターンの並びである。会社は西部の地方新聞社『ウエストサイド』だった。全国版のセントラルタイムス、さらに地方紙として、『イーストデイズ』『サウスポスト』『ザ・ノース』そして『ウエストサイド』があった。

「……ウエストサイド、アクセル・カイザー」

確認するように名を声に出して読み上げた。『カイザー』すなわち『皇帝』。姓だけは立派なものだ。実在する新聞社名なので、ニセモノではなさそうだが、念のために照会しておくことは頭の片隅に止めておいた。

「遠い西部の記者さんが、セントラルで取材中なの？」

「それは守秘義務つてことにして？ まあ、記者だつて言うのだいたい嫌がられるんだよね。特に軍関係は」

最後の一言は、とん、とりザの胸をついた。当たり前のことだけれども、軍には機密事項が多く、正規に申し込んだとしても、おざなり回答の紙切れ一枚が戻ってくればいいほうである。しかし、『人の口には戸が立てられない』ので、零れ落ちた噂話をかき集めれば、かなり信憑性の高いネタになり、うまいこと裏が取れば事実か嘘かはわかる。軍のほうも、知ってか知らずかそのあたりはされるがまま、適当に放置している。どんなに軍に都合の悪いまたは良い話でも、大總統にとってはその辺にある石ころ程度でしかない。

本当に都合の悪いネタは、世間に知られる前にすでに葬られているのだから。

「そうね、セントラルは特に大変でしょうね。それと、こんなところでうかつに社名を言わないほうがいいわ。どこで誰が聞き耳をたてているかわからないわよ?」

「それって忠告?」

「まあね」

「君が言うのなら、本当だろうね」

青年はひよいと肩をすくめて見せた。ベタな仕草にリザもつられてくすりと笑った。

やはり、そのときはアルコールのせいで判断が鈍かったのだと、翌日思うこととなった。『君が』というのは『リザという個人』を指していたのだった。

青年と視線を交わすことなく、斜め上の木製時計を見る。まだメグは戻ってこない。自分と違って友人知人が多い彼女のことだ、誰かと店でばったり、話し込んでいるのかもしれない。

「ああ、もうこんな時間だ。……まったく取材となると向こうの都合にあわせなきゃなんないんだから」

同じように時計を見上げた青年も、再びバッグから今度はくたぐたに使い込まれたヌメ革の袋を取り出した。まだ30分も経っていないのに……などと、口を尖らせて文句をたれつつ、その中からチップ込みにしては少し多めの金額をカウンターの店員に向けて弾く。店員は受け取り、極上の笑みで礼を述べる。

「じゃあまたね、……中尉」

髪の一房にすうつと指をからませ、耳元で囁かれた。弾かれたように体を向けたものの、千鳥足が増えてきた群れの中にさっさと

紛れ込まれてしまう。『待つて』と大声を出すわけにはいかない。出したところで聞こえはしないだろうし、振り返りもしないだろう。指だけが条件反射で腿につけている銃に這わせていた。酔いが吹っ飛ばには十分な囁きだ。

しばらく、放心したまま空いた席をじつと凝視していた。

どのくらいそこを見つめ続けていたのだろうか。ぽん、と肩を叩かれ、敵に後ろを取られたように鋭い視線で振り返ると、メグが目を真ん丸くして両手を挙げていた。

「……リザ？　ちよつと、どうかしたの？」

「えっ？　あ、ううん、なんでもない。遅かったわね」

「ちよつと知り合いに捕まってね。っていうか、ものすごく怖い顔で見るんだもの、こっちが驚くわよ。居ない間に何があったの」

メグが戻るまでどれだけ時間が刻まれたのか、コースターが水滴を吸ってふにやふにやになっている。メグがまた店員を呼んで新しく今度はアイスコーヒーを二つ頼み、ついでにコースターも回収してもらった。

「……ちよつとこの人調べてもらえる？　いつでもいいから」

ビールよりも時間が掛かるのは、ドリップからしているのだろう。とりあえず水をひと口含み、リザは裏返しておいた名刺を丁寧に両手で渡した。

「ウエストサイド、アクセル・カイザー……。うさんくささ百パーセントってカンジね。ナンパで一目惚れ？」

つついついからかい口調になるが、メグの顔つきは神妙でからかっているようには見えない。むしろ心配そうに片眉をあげてもう一度

名刺に視線を落とした。

「とりあえず調べておくわ。実在する人物かどうか、何者が……。それでいいんでしょ」

「いきなりごめんなさい」

「いいって。あんまりリザが頼みごとすることもないし。それより……そんなにいい男だったわけ」

「さあ？」

「さあつて。気になるんでしょ？」

気になるから、どういう人が知りたいから。でも、どうして気になるのか。リザには炭酸のようにぷつぷつとした泡のようなそれがどこから発せられるのかわからなかった。

「……何かあったあとじゃ困るでしょ。特に私たちの仕事って」

適当な当たり障りなく淡々と言葉を出す、感情にはまっていな。それ以上は突っ込まれなかったが、汲み取って納得したのかはわからない。ふう、とメグはため息を吐いた。

「あんまり騒がしいところで飲む気がしなくなったわね。……ウチにこない？」

「ん、ありがと。そうしようかな」

そういうことで、とアイスコーヒーを飲みきり、勘定を済ませて二人は席を立つことにした。

数時間いたものの、心地よく酔うこともできずに、メグは飲み足りないから酒屋に寄ってから帰る、と再びリザの腕を取った。『そんな顔で大佐のところになんか帰せないわよ』と。

第8話（後書き）

先週休んでしまいました。勤め人はつらいよ…。

原作も無事最終回迎えましたね。荒川先生お疲れ様でした。勝手に妄想しちゃってごめんなさい。

次は大佐&エドベースになります。。

第9話

久しぶりに向かうそこは、相変わらず静かに、けれども容赦なく入ってくる人間に威圧感を与えてくる。門から入り口まで、冬が近いというのにやけに青々した芝生が踏まれた様子も無くきつちりと刈り込まれていた。本当は防犯には砂利を敷き詰めるべきだと思うのだが、ここに近づくにつれて方々から監視の視線のシャワーが降り注がれるため、そこまで敏感になる必要もないらしい。

ここの主は、普段はのんびりまったりしていながら、時々付き人を煙に巻いて楽しむのだ。

そう、彼はいつでも楽しそうだった。

派手な織物の上着にぼさぼさの頭の男は、監視にも足を止められることもなく、いつものように扉を叩いた。

「お待ちしておりました、どうぞ」

「どーも」

白いものが多い髪をきつちりとオールバックにし、真っ白な手袋をした、男が少し頭を下げつつ手のひらを中に向け促してくる。この無表情の執事は必ず出迎えてきた。彼以外の人間には扉を開けてもらったことはない。そういうルールになっているのだ。他の人間には極力顔を見せられないために。

「相変わらずかな、こっちは」

「特に変わりはないようです……」

「何にも？」

「……ひとまずお召しかえを」

「面倒だなあ……このままじゃダメ？」

返事をされなかったが、これもいつもの控えの部屋に案内された。要するに着替えるということである。普段はただの客間として使用されている部屋は、夫人の手によって明るく、しかし控えめに整えられていた。ベッドには軍服が一揃いたたんで置かれている。

あまり腕を通すことも無い軍服は、彼にとつては囚人服に近いものだ。なにせ首元がビッチリ覆われるのだ。息苦しいことこの上ない。

ため息をひとつ落とし、軍服に身を包む。襟の階級章を確認し、髪をざつとなでつけると表情を一変させた。

タイミングよく扉が叩かれ、例の執事が「そろそろよろしいでしょうか」と声をかけてきた。

「ああ、今行く」

口調も纏う雰囲気も、もう一人の自分に書き換え、その姿はさきほどのちやらんぼらんな様子は微塵も無く、どこにでもいそうな軍人へと変わっていた。

ゆつくりとひとつ瞬きをし、再び現れた瞳は、幾分青さを増しているようだった。それが、彼にとつての完了の合図だったかのよう

に、扉のほうへと一歩踏み出した。

すっかり陽も落ちている廊下は点々と等間隔にぼんやりとした照明があつても薄暗い。足元は赤い血を溶かし込んだような絨毯がしかれ、足音などほとんど聞こえない。何度も通ったこともあるし、別に仰々しい案内などいらないと思うのだが、それも一種の監視なのだろう。前方をしずしずとすすめるように進む執事は軍人並みに隙がない。何か事を起こしても、窓向こうから一瞬で蜂の巣にされる手はずは整っており、見えない包囲は完璧なはずだ。

やがてひとつの両開きの扉の前にたどり着き、ふい、と執事は横にずれた。

彼は自分のこぶしを軽く扉にたたきつけた。

「はいりたまえ」

さらに瞳がきゅっと縮まり、ひとつ息をついて扉を押し開いた。

「失礼します」

一段と豪華さを増した空間。ムツとする空気が彼を通り過ぎ、廊下へと一気に逃げ出していく。体をすべて部屋に移すと同時に、扉が閉められた。

大した調度品はないものの、真正面に巨大なデスク、左側一面に書棚、右には暖炉。そして、デスクのまん前に、まるで尋問でもするかなのような布張りのイスがひとつ。

座るわけではないが、横に立つと向かいの主との距離感はちょうどよい。単にイスは主後ろからいつでも彼を打ち殺せるように距離を測るために置かれているのだった。

無表情でその横に立った。

「さて、久しぶりに帰ってきて、どうだったかな？」

「とりあえず、賽は投げましたので、あとは向こうがどう出てくるか、というところです」

「君のシナリオどおりに運びそうかね？」

「……まどろっこしいことをしなくても、普通に呼び出して処分するなりなんなりすればよかったのではないですか？」

つい、と主は片眉を上げたが、デスク上で組んでいた手を広げ、ゆっくりと立ち上がった。

「まあ、命令ひとつ、書類ひとつで済ませるのは簡単だが、最近暇だね。ちょっとしたゲームをしてみたいんだよ」

こんどは彼が片眉を上げた。この主は単なるゲームのひとつとしてしか考えていないようだった。からからと笑いながら暖炉に新しい薪をポイポイと投げ入れ、新たな赤い熱をを起こしていく。

「もちろん、人命は最大限に尊重するが、不慮の事故もありうるだろうからね……」

背中を向けたまま、静かに引っかけ棒で暖炉内をつつく。最初にあつたものががらりと崩れ、新しい薪が生命力を増したように、それを押しつぶしていった。

「しばらく、こちらにいるのだろうか？ 『J』？」

「『Q』にも調べて欲しいことがいくつかありますから」

「ふうむ……そろそろ、新たに『A』あたりを加えたほうがよさそうだな」

「そうしていただけるとありがたいのですが。そろそろ年齢的にキツイです」

「まだまだ、君は若いよ。私よりはるかにね。……我々は人数が多ければいいというわけではないが、もうひとり君の補佐にまわせるような候補をみつくるっておこう」

「ありがとうございます」

報告らしい報告はないが、そんなものなくてもいつでも情報は得ているので、会うのは単なる社交辞令にすぎない。しかし、ひとりでもふたりでも自分たちの仕事を軽減できる人間は欲しかったところなので、素直に礼を述べた。

第9話（後書き）

日ならぬ月をすつとばしてしまいました。大佐の回にするつもりが、別人物が出張ってますね。そんなつもりはなかったのですが。夏なのに冬の話で、暑くて恐縮です。熱中症になりかけましたが、がんばります。。

第10話

ひとつ踏み出すと、空気はまだじつとり湿り気を含んでいた。

ほんとうに霧かと思うような霧雨で、下からスモークがわき上がって、歩むたびに小さな渦が巻き起こる。

下に溜まるのは地面の方が暖かいから。痛いほどの空気は、季節のリレーがなされている証だった。

まわりつく細かな粒は、払い落としても軍属であるということをお忘れるなというように、縫い目から染み入ってくる。

就職先のひとつとして軍を選んだ。自分では自分の持つべき能力を生かすのであれば、ベストな選択はずだった。

部署を移っていくたびに、複雑な巢に取り込まれたというか、絡みとられたというか。

今では、噂のみで存在しているという職に就いている。

入りたての新人は、そのあるかどうか分からない得体の知れない部署の噂を一回は耳にする。

自分もそうだった。

真意はどうかと、先輩軍人に聞いてみるものの一笑に付されるだけで、毎年毎年必ず同じことを聞かれるのだと苦笑され、とりあえず納得する。やはり、ただの噂なのだと。

しかし、年数がたつにつれ、信憑性のある話の一つまたひとつと蓄積されるうちに、なんとなくひっかかるような気がしてくるのだった。そして、それが軍属であればわかる、タブーなものの一つであるということも。

やがて先輩と言われるようになり、新人に向かって返す台詞も表情も代々引き継がれていく。そうやって、自分たちでベールをかけ続けているのだった。

ゆっくりと建物を振り仰ぐ。霧雨につつまれた館は言葉を話すこと

もなくこちらを見下ろすのみ。窓から漏れる明かりには暖かさなどひとかけらも見えない。家族が住んでいる、あたたかな灯りはここには似合わない。

温もりは生まれてこのかたほとんど感じたことはなかった。

そしてこれからもあるかどうか…。

訪れる時間は決まって夜で、陽のあたらない、陰でこそそ嗅ぎまわる自分にはぴったりだ。

口元がいびつに歪んで、苦笑という表情を形作る。

「そろそろ…お役御免かもな」

きびすを返すと、濡れて色濃くなった髪がはねて戻る。虹彩は紺からさらに青みを強め、ほんのりとごくわずかに発光していた。姿はやがて白と黒が混じった空間へととけ込み、消えた。

同じ頃、鋼の錬金術師エドワード・エルリックは、宿に戻ってからもう何度目かわからないくらいの空気を吐いた。

「兄さん、もう何度目？」

体に反響してしまうため、やや押さえ気味のくぐもったアルの声。今は下半身を取り外して、表面の手入れをしている。ときどき油を関節に落とす。キイキイと反応を確かめるように動かすが、ベッド上の人物からは目線は外さなかった。

ふてくされているように、こちらに背を向けて転がる少年。

本当はアルもそうであるべきの、血の通った体。鮮やかな赤のコートは適当にその辺の椅子に引っ掛けられ、いまはむき出しの肩から先を同じように灯りを反射していた。

その部分は、あたたかな血は通ってはいない。

「しょうがないよ、軍の仕事なら。僕はついていけないもの」

ギシ、とスプリングが軋んで、エドがこちら側を向く。

好戦的なときは爛々と自信を放つ金の瞳は、鈍く陰を持ち、いまのエドの心情そのものようだ。

「ごめんな、アル」

弱々しくつぶやく。

エドたちにとって重要なものまたは方法を探すためにセントラルを訪れたのに、あっさりと大佐に主導権を取られた。軍にとっても関わりのある事項であれば仕方ない。

そういう誓約を取り交わしてある。国家錬金術師は軍命令が下ればそちらが最優先事項で、しぶしぶそれに従うことしかできなかった。そして、アルはただの一般人扱いになるため、行動をとにもするこ

とができない。

わかつてはいるが、大佐と中尉とエドと、たったそれだけのメンツにすらアルを入れることはできない。

当たり前なことだが、大佐は軍人として事務的にそう告げるのみだった。

それが、軍の狗というものだ。

頭ではわかつてはいるが、現実を見ると腹立たしくなるのはなぜだろう。

いつも傍らにいないはずのアルがいないと、エドでも信じられなくらい不安に陥るときがある。精一杯大人ぶっても、どこかでアルを、物理的にではなく、心の頼りとしていたのがわかった。

頼りつつも、それが自分の弱さ故の結果だと責めるために。

「兄さん、明日早いんでしょ？ もう寝たほうがいいよ」

「ん…」

数度まばたきをし、ことりと枕に頭がしずんだかと思わぬうちに、規則正しい寝息が聞こえてきた。

静かにパンツをもとの位置にはめ直し、ベッドに近づきエドの下にある掛け布団をそっとひっぱり、小柄な体にふわりと落とした。

今のアルよりは遥かに小さい身体。

心身ともに縛りつづけている罪というやつは、この身体には大きすぎて、釣り合いがとれていない。

二人で起こしたのだから、二人で均等に分け合うべきだと思う。

けれども、エドは一人でそれをすべて請け負うとする。

生身の身体をちぎられ、その熱い痛みと精神的なショックによる二重の苦痛に耐え、なおかつアルの魂を引き戻したのだ。

並みいる受験者をことごとく凌駕し、手に入れた国家錬金術師の資格も。

たった十数歳の子供のできることではない。

もし、逆の立場だったらどうだろう、そう考えるだけでも小刻みに震えてくるほどに。

表現はできても、感じることはできない、でもかすかに身体が震えている。

魂だけのくせに、温かいとか冷たいとかわからないくせに、いつちよまえに震えている、それがこんどは無性に可笑しかった。

いまだどんな表情をしているのだろうか。

「おやすみ、兄さん」

せめて、夢の中だけでもやすらかでいて欲しい。現実はいろいろつらすぎる。

（神様だつて、それぐらいのことで目くじらたてないよね、きっと）

窓ガラスには水滴がいくつか道筋を作り落ちていた。

水が皮膚にあたるあの感触、すこし埃っぽいような匂い、上がった後の清々しい青空の空気の流れが頬を通して……。

そうやって時々思い出す。人間としてごくごく当たり前であった頃の自分を。

壁にもたれたまま、そつと思考を深く閉じていった。

第11話

継ぎ目の部分でがたりと跳ね、建て付けのよくない扉が少し開いた。思った瞬間、がくりと下に落ちる感触が足下から起きると、とわななきながら元の位置に戻った。

セントラルを中心に、東西南北大動脈として鉄道が整備されている。しかし、毛細血管にあたる部分については、諸々の事情により割と手抜きであることが多い。

段差で簡単に開く割には、いざ手をかけるとひっかかって開けにくい車掌室の扉がスライドした。

そろそろ、目的の駅に到着すると知らせるため、一等車両に向かう。この時期に一等コンパートメントを利用する客は珍しい。始発のイーストシティから乗り込んだ妙な三人組。家族連れ、といえば見えなくもないが、あまりにもうさくさすぎる連中だった。

黒髪黒目の男とやや深い色の金髪の女に、金髪金色の瞳の少年がひとり。三人が三人ともやたら目つきが鋭く、おおよそまともな商売をしているような感じではない。

もしかすると軍関係者なのではとも思ったが、少年がそのようなものに属しているなどとはありえない。

最初の切符確認では偽物ではないかと、疑いが頭をよぎったが本物であった。

ぼつぼつと乗客がいる一般車両を確認しながら、連中のいるコンパートメントにいく足取りはなんとなく重い。

金額の張る個室をとる客はありがたいはずなのに、どうしても気がめいる。

やはり、軍が何かを調べにきているのではないかと、苦い疑惑が広がる。

基本人間を移動させるための列車だが、いくつかの車両は荷物専用

で物資を配達するのに使用されている。中身がなんであるかはわからないけれども、ただ、運ばれていく。中には法律に抵触するものもあるのだろうが、それは不可侵なものとしていっさい関知しないこととしている。そういう取り決めになっているのだった。指摘して面倒なことになるよりも、だまって金を受け取って届けさえすればよいのだ。

そのうさんくさい連中は、地図ではかろうじて東にへばりついてる場所の駅に降り立った。

最終駅で折り返しにあたるここは、いくつもの車両が点検のために引き込み線から出入りをしている。駅自体も中都市部にあるくらいのサイズで、がらんとした構内の天井にエドは視線を巡らせた。

「こりやまた、やけに立派だな…」

建ててからそう何年も経ってはいないだろう、真っ白な壁に足下は色付きのタイルが敷き詰められている。

「避暑地だから、夏は大勢の客でこったがえしているはずだ」

「ふうん、で、今は閑散期、ってなワケ？」

改札を抜けてからロイは『ここで待っている』と、エドとリザと荷物をベンチに置き去りにしていた。

数分経ってチャラチャラとした音とともに戻ってきたロイの指には、鍵がひっかかっており、音はそこから発していた。

「ここに来たことでもあんのかよ」

「何度か、な」

出口に向かいつつ、ぼつぼつと会話をする。

そして、扉をくぐつてすぐに眼をぎゅつと細める。目の前でフラッシュを焚かれたような感覚。徐々に慣れてくれば、ただの雪の反射に目が追いつかなかったというだけのことなのだが。瞳の色の薄いエドとリザは一瞬立ち止まる。

「二人とも大丈夫か？ とりあえず、車をまわしてくるから、そこにいろ」

動きにくそうな二人をまたそのままにして、目の前にいくつか駐車している車のひとつに向かっていった。

踏みしめられた雪は固く、その上にさらに新雪が降り積もり、運転には苦戦しそうな感じだった。だからといって歩く距離でもないし、タクシーなどというものはこの時期営業はしていない。

出発前に手配をすませていた車は、いかにも頑丈そうなタイヤの大きいジープタイプ。夏場はファントムだらけになっているのを見てうんざりしたことが頭をかすめた。

イグニッションをまわすと、思ったよりも軽くエンジン音が響く。がりごとりと固まった轍を踏みしめて立ち尽くす二人へ向かい、荷物を後ろのハッチから放りいれてすぐに出発した。

冬は日が落ちるのが早い。さらに周囲が雪で囲まれているのは、どこを走行しているのか判りづらく、道を外れて脱輪なんてことはさけない。多少壊れたりしても錬金術師が二人もいればなんとかなるものだが、無駄な労力など使わないでいるに越したことはない。

ほとんどが木材で入口が塞がれている店のメインストリートを抜け、民家が点在している大通りをしばらく走り、やがて山肌に縫うように走る細道へと入っていく。

第12話

一応、除雪はかろうじてされているから、この先には家がある。
という解釈は間違っではないかと、思う。

（確かに、たまに、たまに、民家らしきものはあるけどよ……）

列車よりも明らかに寝心地が悪化しているのは、道路状況によるものだと、エドは思った。

ついでに言えば、リアシートにはエアコンの恩恵はないに等しい。
出発前、大佐に『アホじゃないかと思うくらい着込んでいけ』と言われたのが冗談ではないことが身にしみてわかった。

少なからず隙間というものは存在する。誰もが知っているように、
暖かい空気は上、冷たい空気は下に溜まる。

ただでさえ、金属の片腕片足はその影響をもろにつけてしまう。

身体との継ぎ目のあたりがギシギシと少し痛む。

隙間がないように、マフラーを巻き直した。

「なあ、暖房って利いてんのか？」

「一応、全開なんだがな。後ろには届きにくいから仕方ない、我慢しろ」

意外にも雪道の運転には手慣れているようだ。時々ギアを入れ換えてはいるものの、おそろおそろなどということは全くなく、むしろ余裕さえありそうだった。

「寒いなら、前と変わる？ エドくん？」

軽く身をよじり、中尉がこちらを向く。

「その必要は無い。普段はもつと過酷な状況なんだろう？ これくらいまだまだマシなはずだ。そうだろう？ 鋼の」

妙にとげのあるカンジだが、確かに、アルとの旅はいかに金をかけないか、というのを念頭に置いているところがある。アルに至っては食事の必要もないため、とにかく貧乏旅行になってしまいがちだ。

「でも、彼はまだ……」

「子供じゃねえよ」

中尉がためらいがちに濁した言葉を、エドが引き継いだ。

つまり、彼女は子供の体には良くないのでは、と言いたかったのだろう。

けれども、子供でも大人でもどっちつかずなエドも知っている。だから、複雑な表情をして濁したのだ。

「……、中尉は女の人だから、体を冷やしちやいけないんだよ。だから、いい」

「わかってるじゃないか」

「そう言わせてんのはどっちだよ」

そういつてエドはぶうつと頬をふくらまして目線を外にずらす。

ミラー越しにちらりとそれを見ると、大佐はくくつと笑う。

「そういう態度がまだガキだと言っただ」

「悪かったな、ガキで。あーそうですよ、俺は誰かさんと違って、まだぴつちぴちの十代だからな！ 三十代のおっさんは体温調節もうまくいかないんですかねえ」

「ほう、上司に対してそのセリフが出てくるとは上等だ。……査定

下げるぞ」

「ひつで、横暴！ パワハラ！」

ポンポンと言い合う二人に、中尉もくすくすと笑みをこぼした。

「何が可笑しい、中尉」

「んだよ、なにが可笑しいってんだよ」

同時に同じようなセリフが出てくる。中尉の肩が小刻みに震えているのは、泣いている訳ではない。

掛け合いのうちに、車内の温度が上がった気がするののは気のせいではない。

リザも普段は見られない、素に近い大佐やエドの会話が楽しく感じられ、ナビシートでも暖まらなかった身体がほんわかとしてきていたのだった。

「まあ、いい。鋼の。お前の後ろに毛布が積んであるから、着くまでそれにくるまってる」

「そーいうことはあ、早くいつてくれよ！」

そうして振り向こうとした瞬間、ガクン、と車体が大きく跳ね、不安定な体勢だったエドの頭は天井へとヒットした。

ぐらぐらと左右に変則的に全体がぶれ、ギギギ……と金属が悲鳴を上げる。

ロイは二度三度ハンドルを左右に振りなんとか主導を取ろうとしたものの、結局グツリという嫌な音とともに斜めにかしがって停止した。

「いつてえ……」

したたかに頭をうち、さらに左右にゴロゴロと転がされてしまった。
いつもより厚着で、さらに厚手のダッフルコートがクッションにな
ってくれていた。

「……止まったか。二人とも大丈夫か」

第13話

仕事をするということは普通のオフィスであろうと、軍の施設内であろうと風景的にはあまり変わりはない。

階級が少尉だの大佐に呼称が違うものの、どう見ても課長だの係長だのに近い気がする。

特に最近、平和すぎるぐらいな日々がつづき、軍なのにオフィスワークの比重が高い。

「よつと……」

借りたファイルの束が多すぎて右に寄ったり左に寄ったりしながら一人の青年がよろよろと廊下を急いでいた。

やる気がなさそうな職員がため息をこぼしたのは、とんでもない申請をする貸し出す書類のあまりの膨大さということだと思いたい。いつもなら、目の前に置かれる書類の類いだが、今回は直接保管場所まで引きずり込まれ、あとは自分でどうぞとのたまってくれた。

一言、『マジ?』とつぶやいたら、『マジです』とさっくり返されたのだから。

往復既に数回あまり。体力勝負な作業などもちろん得意のはずもなく。

所々がめくれているリノリウムの廊下で、コンクリートが顔を出しかかっているまさにその部分に、見事につっかつた。

廊下にファイルがぶちまけられ、中の書類も羽根のようにふわふわと飛び散った。

「あああああゝっ!」

ヤバいなと思いつつ無理をしていた肘と膝がどうやら限界を告げた

ようだ。

その場にぱったりと倒れ込みたいのを押さえつけながら集めると、自分以外に誰かが拾い上げているのが見える。

「これはまた見事にぶちまけましたねえ。早めに補修しないとけが人がでますよ、と言ったはずなんですが」

「ファルマンさん」

ファルマンは苦笑いを浮かべつつ、とんとんと束を整えて差し出してきた。

「随分とぼろぼろのようですねえ」

「ありがとうございます。助かります」

たぶん、この人なら手伝ってくれる確率が高い！　そう、期待を込めた眼差しを向けたが、ファルマンはあっけなく『私も用事がありますので』と、無情にもあっさりと去っていった。

几帳面にきつちりと揃えられた束を渡されてがくりと肩を落とすしかなかった。

「大佐、もう意味判りませんよ」

しばらく小さくうずくまっていたが、それで片付くわけでなし、仕方なく一枚一枚拾い集めるのを開始した。

何をどうしろという細かな打ち合わせもないまま、大佐は中尉と鋼の少年を連れて旅立ってしまった。

目的が何なのかさっぱり判らぬまま『調べる』というのはアバウトすぎる。

「何を調べるっていうんですかねえ」

その後は結局誰も廊下を通らぬままだった。

そうして一人暮らしの家に帰ってもどうしようもないからと腹をくくり、しばらくオフィスに留まることを決めた。

何日か泊まり込むことなど以前からしていたことだ。今回は、もしかしたら長丁場の大捕り物になるかもしれない。

本業は通信士だが調べ物や情報収集能力などについても、大佐は一目置いていた。信用には応えてやらねばなるまい。

あと数回往復すれば書類は運びきれだろう。次は食料と毛布の確保だな、と、フユリーは思った。

集めきつたのを確認し、明日は筋肉痛必至の震える両膝をぺしりと叩き、気合いを入れてから立ち上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7189k/>

ROAD

2011年6月10日23時06分発行